

障害者に対する Unconscious Bias が意思決定に及ぼす影響

—Implicit Association Test を用いた実験的研究—

Effects of Unconscious Bias on Decision Making for Disabled Citizens

: An Experimental Study Using the Implicit Association Test

神原由菜^{*1}, 沖林洋平^{*1}

Yuna KANBARA^{*1}, Yohei OKIBAYASHI^{*1}

^{*1} 山口大学教育学部

^{*1}Faculty of Education Yamaguchi University

Email: yoki@yamaguchi-u.ac.jp

あらまし: 本研究は、障害児への接触経験の違いによる障害や障害者に対する潜在的態度と顕在的態度の関係を検討した。障害者に対する潜在的態度を実験的に検討するために、PsychoPy を用いた Implicit Association Test を実施した。障害者に対する IAT では、先行研究におけるピクトグラム刺激に加えて本研究で自作したピクトグラム刺激を用いた。意思決定としては、合理的差別に関係する現実的な場面想定項目を自作した。本研究の結果から、障害児に対する接触経験の違いによって、合理的差別に関する場面に
キーワード: 潜在的態度, 障害者, Implicit Association Test (IAT), 合理的差別

1. はじめに

日本において、障害の有無にかかわらず、全ての人が平等に生きる社会の実現を目指しており、差別や偏見への改善をはかる様々な措置が行われている。

一方で、内閣府が行った世論調査によると、世の中には障害のある人に対して、障害を理由とする差別や偏見があると思うか聞いたところ、「あると思う」とする者の割合が 88.5% となっている。また、障害を理由とする差別や偏見が「あると思う」とする者に、今から 5 年前と比べて障害のある人に対する差別や偏見は改善されたと思うか聞いたところ、40.4% が「改善されていないと思う」と答えた。

加えて、2010 年以降、新型出生前診断 (NIPT 母体血胎児染色体検査) が導入され、実施拡大に伴い、様々な意見が飛び交っている。妊婦の「安心」のためのニーズであり、女性 (カップル) の自己決定の権利と捉える人や、障害者に対する偏見がもたらす行為と捉える人もいるだろう。

そのため、障害者と健常者が共に生きる公平な社会を構築するためには、偏見や差別の背景となる人々の障害者に対する意識や態度、更にそれらと新型出生前診断のような意思決定場面との関連を調べることが重要となる。

2. 研究目的及び研究方法

2.1 研究目的

本研究では、障害者に対する顕在的態度と潜在的態度に着目し、定期的な障害者と接触する経験の有無やその形態が障害者に対する顕在的態度や潜在的

態度にどう関与するのか検証する。また、その顕在的態度や潜在的態度が新型出生前診断等の意思決定の場面とどのような関連があるのかも検討する。なお、本研究では潜在的態度を IAT で測定するが、pic_IAT では、目に見えやすい障害者 (肢体不自由者) ピクトグラムと目に見えにくい障害者 (発達障害者) ピクトグラムを作成し、実施する。先行研究で、障害種での潜在的態度に差がみられたことから、目に見えやすい障害とそうでない障害にも差があるのではないかと考える。加えて、通常の学校と特別支援学校に潜在的態度の差がみられるのか測定するために、それぞれの学校の写真を刺激として用いた学校 IAT も作成し、検討する。

2.2 研究方法

大学生 57 名 (男性 19 名/女性 38 名) を対象にノートパソコンを使って、以下の調査を行った。本研究では、以下の項目を用いた。1. 象徴的障害者偏見尺度日本語版 (清水ら, 2021) (The development of a Japanese Version of the Symbolic Abeism, 以下「SAS-J」)。11 項目によって構成された尺度であった。個人主義因子と現状の理解のなさ因子の 2 因子構成であった。回答は 7 件法 (1 「強く反対する」、7 「強く賛成する」) であった。2. 公正世界信念尺度 (村山ら, 2015) (beliefs in a just world)。11 項目によって構成された尺度であった。究極的公正世界信念因子と内在的公正世界信念因子と不公正世界信念因子 (項目例「世の中の大部分のことは不公平だ」「世の中のあらゆることは全く不公平だ」) の 3 因子構成であった。

回答は5件法(1「全くそう思わない」、7「とてもそう思う」)であった。3. 合理的差別に関する意思決定項目(自作)を用いた。「出生前診断は受ける方が良い」といった個人の障害者に対する仮定の行動を尋ねる項目5項目と「高すぎる税金のために毎日の生活が維持できないよりは、今のところ自分は病院に行くことは少ないので医療費が少し高くなったとしても、税金が上がらない方が良い」といった障害者の社会的影響に対する個人の考え方を尋ねる項目6項目によって構成された。回答は5件法(1「全くそう思わない」、5「とてもそう思う」)。

3. 結果

3.1 接触経験や性別による SAS-J の比較

SAS-J の個人主義に関する項目と現状の理解のなさに関する項目について、従属変数を SAS-J の値として、それぞれ性別と接触経験を参加者間要因とする反復測定分散分析を行った結果、性差($F(1,53)=.05, ns$)、接触形態($F(2,52)=.10, ns$)ともに有意ではなかった。

3.2 接触経験や性別による公正世界信念の比較

公正世界信念の究極的公正世界信念に関する項目、内在的公正世界信念の項目、不公正世界信念の項目について、従属変数を公正世界信念の値として、それぞれ性別と接触経験を参加者間要因とする反復測定分散分析を行った結果、性差($F(1,53)=.83, ns$)、接触形態($F(2,52)=.26, ns$)ともに有意ではなかった。

3.3 Q4 の項目の回答傾向

Q4 の 11 項目について、仮説の因子構成が得られるかを検証するために、因子分析を行った。プロマックス回転、最尤法を用いた。並行分析の結果、妥当な因子数は規定されなかった。累積負荷量は 10.92% であった。BIC=-129.30, RMSEA=.04 であった。以下、本研究では、Q4 の分析は項目ごとに行うこととした。

3-4 接触経験の違いによる pic_IAT の IAT スコアと Q4-1 の関係

pic_IAT スコアを従属変数、Q4-1 を共変量とし、

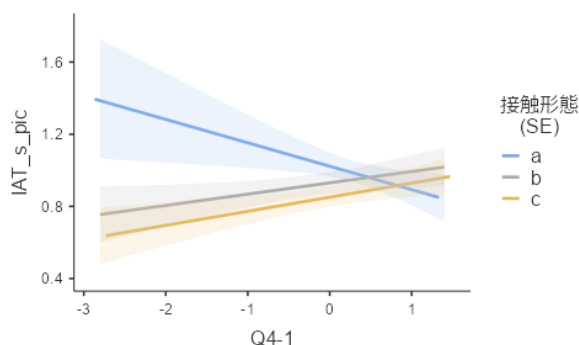


Figure1 接触経験の違いによる pic_IAT スコアと Q4-1 の関係

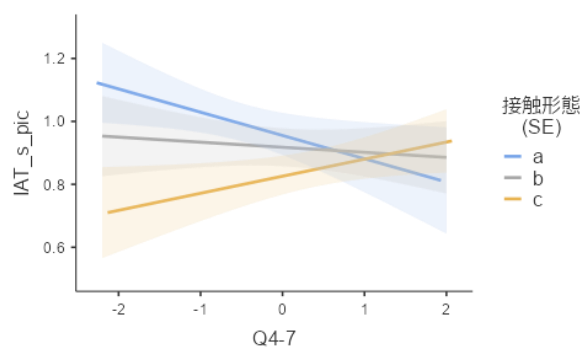


Figure2 接触経験の違いによる pic_IAT スコアと Q4-7 の関係

接触形態を参加者間要因とする一般線形モデルを行った。その結果を Figure1 に示す。接触形態 a と c 間における Q4-1 の交互作用の推定値が有意であった ($b = .19, p = .03$)

3-5 接触経験の違いによる pic_IAT の IAT スコアと Q4-7 の関係

pic_IAT スコアを従属変数、Q4-7 を共変量とし、接触形態を参加者間要因とする一般線形モデルを行った。その結果を Figure2 に示す。接触形態 a と c 間における Q4-7 の交互作用の推定値が有意であった ($b = .32, p = .02$)。

4. 考察

接触経験の違いによる pic_IAT の IAT スコアと Q4-1 の関係では、pic_IAT のスコアが高い、つまり潜在的偏見が高い人は、出生前診断を受けないと回答した。このことから、障害のある子どもと定期的な関わりがある人は、その関わりによって潜在的偏見が変化し、出生前診断の受診という意味決定に関わりがあることを示唆する。また、潜在的態度としては、障害者を「不快」と感じる一方で、「障害があってもなくても関係ないため出生前診断を受けない」という偏見のなさを示す顕在的態度として見られた。

接触経験の違いによる pic_IAT の IAT スコアと Q4-7 の関係では、子どもとの関わりがない人の中で、pic_IAT のスコアが低い人、つまり潜在的偏見が低い人は、税金が高くなっても良いので医療費を下げて欲しいと考えていることがわかる。子どもと関わる経験がなく、障害者の実態を詳しく知らないため、潜在的偏見も低い一方で、医療費は病院の利用経験があるからこそ、医療費を安くしたいと感じているのかもしれない。このように、経験が潜在的態度や税金に影響を与えているとするならば、接触経験が潜在的態度に関連があることを示唆する。

5. 参考文献

栗田李佳・楠見孝(2012).障害者に対する両面価値的態度の構造—能力・人柄に関する潜在的・顕在的ステレオタイプ— 特殊教育学研究,49,481-503.